



発行：玉琳山 天寧寺
〒460-0018
名古屋市中区門前町3-21
TEL 052(321)5865
FAX 052(324)8079
tenneiji@road.ocn.ne.jp
発行人：副住職 大野俊人

天寧寺ホームページ
<https://www.tenneiji.net>
天寧寺 名古屋 検索

謹賀新年

令和三年の初春を迎え、謹んで新年のお祝辞を申し上げます。ご家族の皆様のご健康とご多幸を心よりお祈りいたしております。



「一陽来復」とは、易の言葉で

冬が終わり春が来ることや、新年が来ること、悪いことが続いた後で幸運に向かうことをいいます。

昨年、コロナ禍にはじまり大雨による災害など、これまでにならぬ辛い状況が続きました。未だに不安な日々を過ごされ、大切な方

と会うこともままならず不自由な思いをされているかと思えます。冬のように厳しい時を乗り越えた先には、必ず穏やかな春がやってくるはず。



厳しい状況は確かにその通りですが、一方で多くの方々は、折り合いながらの日常を過ごしています。家庭では家事の分担や家屋の片付け、社会では医療従事者へ励

Instagram
はじめました
@tenneiji

写経会
毎月28日
15時～16時半
仏教講座
毎月第1・3金曜
13時半～15時

ましのメッセージを送った児童生徒たちの心。マスクを着け、消毒を心掛けながら通勤する人々の姿。そこには、困難な中にも折り合い、感染のリスクを背負いながらも、これまでの生活を新しいステージへと導いていく人々の日常が、着実にいとままれていきます。そして、今は「わざわざ」「人類の敵」と言われるウイルスが、やがてワクチンとなり私たちの体内に受容される時、本当の意味でこの難敵との同化が実現し、敵味方なく新たな日常という道が開かれます。必ずその日はやって来ます。希望を捨てず幸せな日々を願い、その日に向けて余念なく準備を進めて参りましょう。



「発心は易し、

されど持続は難し」

ほっしん やす
じぞく かた
年頭に当たって「今年こそやるぞ」と色々な計画を立てて決心するのは楽なのですが、問題はそれを持続できるか否かにあります。真新しい日記帳を買ってきて、最初の数ページ以降は真白なんてことはよくある話です。

仏道修行の発心と持続を「精進」といいます。お釈迦さまが北インドのクシナラという地で八十歳のご生涯を閉じる直前に説か

令和三年年回表

一周忌	令和二年
三回忌	令和元年(平成三十一年)
七回忌	平成二十七年
十三回忌	平成二十一年
十七回忌	平成十七年
二十三回忌	平成十一年
二十七回忌	平成七年
三十三回忌	平成元年
三十七回忌	昭和六十年
四十三回忌	昭和五十四年
四十七回忌	昭和五十年
五十回忌	昭和四十七年

法事のお申し込みはお早めに

れた『遺教経』の八大人覺の一つです。「精進」とは分かりやすくいえば「仏の教えと悟りを求めて迷うことなくひたすらに進むこと」です。

従って仏教徒の私たちは、年の暮れの多忙の中にも、新年の寿の中にも、コロナ禍中にも仏道を求める心を失ってはなりません。

「去年今年貫く棒のようなもの」という俳句があります。

大晦日と元旦は背中あわせに繋がっており、一夜明けたからといって周囲の景色が一変するわけでもなく、要は人々の「心のスイッチ」の切り替えいかにあるのです。

実は、大晦日も元旦も同じくかけがえない一日であって、決して特別の日ではありません。よりよき日送りの心がまえこそが一番大切なのです。

道環(『正法眼蔵』行持の巻)という言葉をご存知でしょうか。仏道修行の日送りは丸い環のように

切れ目なく繋がっているという意味です。例えば、朝の目覚めと共に新しい生き方を志し(発心)、

日中はひたいに汗を流して努力を重ね(修行)、夕方には快い充実感

と満足にひたり(菩提)、夜はなんの迷いもなくグッスリと深い眠り

に入る(涅槃)というのが、仏教徒

の正しい一日の修行の姿です。

思えば長い一生も、この一日、一日の道環によって成り立っていることに気づかねばなりません。

仏道修行という難しい経典を読んだり、坐禅したり、作務掃除をすることだけのよう誤解されがちですが、一日、一日を丁寧に、悔いなく、正しく生きることが修行の根幹なのです。



↑修行僧の回廊掃除の様子

私たちはよく過去の思い出にふけったり、未来に理想の姿を描いて夢みたりする習性を持っております。

しかし、過去に遡って、楽しんで悔やんだりする訳でもなく、

未来に飛翔しての理想を求める働きがある訳でもありません。

ただ、「今日の一日の今ここを生きぬく」という現実があるだけです。

要は、今日一日をどんな生き方をするか過去の思い出を、未来の夢に連結しているに他ならないのです。長い道のりも、いま踏み出した一歩と連なっているのです。

仏事なんでもQ&A

納骨の時期は？

愛する人の遺骨をあんまり長く身近に置かれてしまうと、なかなか悲しみを癒すことはできません。残された人の心に遺骨は死のしるしとして、愛するゆえの執着心をつのらせます。死のしるしから、仏のしるし、位牌へと、区切りをつけることも大切です。



納骨は一般的には、四十九日から一周忌を目安にされる方が多いです。遅くとも七回忌までには納骨されることをお勧めします。

人間は誰でも、「生命」と「肉体」を親から頂いてこの世に生をうけます。親から頂いた生命と肉体を大切にして、一生懸命仕事をし、家族と共に暮らし、また友達やいろんな人と交わって、最後は生命尽きてこの世とお別れをして、肉体はお骨となってお墓に入るわけです。人の生命というものは、肉体を得ることができたからこそ、一生懸命に働いて子供たちを育て、また人にも尽くすことによって、人として生きることができたといえます。

昔から「親の墓は子が建てる」という教えがありますが、長い間

共に暮らした、近しい大切な人の遺骨を粗末にはできません。お骨は単なる物体ではありません。お骨は亡き人の形見、「生命の象徴」そのものです。その「生命の象徴」に感謝し心を寄せて、大切におまつりして供養する場所がお墓なのです。

日頃忙しくてお墓参りできない人でも、何とか時間をつくって縁深い人へのお墓参りをしましょう。

からだ



人が母親の胎内に宿ってからこの世界へ出るまでには十ヶ月以上かかります。その期間、一つの細胞から無数の分裂がくり返され、人体が形成されていくわけですが、それには、とても興味深い方法がとられているといえます。

まず、芋のような形の大雑把なものができる。たとえば手の場合、こぶしのようなものができ、

次にそこから不要な細胞が剥落して指になるのだそうです。このように、人体はまず大体の形が作られて、次第に細かく仕上げられていくのです。

それはちょうど仏像を彫ると同じ過程だとは思いませんか。仏師は、木から仏を作り出すのではなく、その木の中に本来から在る仏を彫り出すのだといえます。それにならって言えば、私たちの

「からだ」とは、本来的に存在する生命が、母親の胎内の中で形となって、余分なものを取り除いて彫り出されたもの、と言えないでしょうか。

つまり、私たちのこの「からだ」とは、新たに作り出されたものではなく、載いたものなのです。

ろうはつせっしん 臘八摂心

十二月になると、曹洞宗の本山では修行僧たちに特に厳しい禅の修行が待っています。一日から七日の深夜にかけて臘八摂心が行なわれます。臘八摂心とは、お釈

迦さまが七日間ひたすら坐禅を続けられた後、十二月八日の未明に大いなる悟りを得られたと伝説に伝えられる事から、それを追体験すべく行なわれる修行のことで、

古くから禅宗の寺で行なわれてきました。私の修行した大本山總持寺では一日の午前三時起床で坐禅が始まります。摂心の期間は朝夕の勤行や法要等ふだんの行持はすべて中止して、ほとんど一日中坐禅の中に籠ってひたすら坐禅をします。起きて半畳、寝て一畳の修行が、文字どおり行なわれます。食事もすべて、堂内で坐禅したまま行ないます。僧堂を出るのは、最低限の所用と講堂で行なわれる禅の講義の時だけです。

この修行に入ると、坐禅に慣れているはずの修行僧であっても三日目ぐらいから足がとも痛くなってきました。さらに、体の節々が痛くなり、五日目ぐらいからはやっと坐を保てる程です。六日目、七日目は、もはや限界を超え、朦朧とした意識の中で、ひたすら坐り続けるのです。限界を超えた体を支え続けているのは、少しでも、

お釈迦さまや祖師方や先輩方に近づきたいという道心だけといってもいいでしょう。修行僧は、摂心を体験する事によって、禅僧としての覚悟を身につけていきます。

坐禅においては一般に、「忘我無心になる」ということが提唱されます。私も、坐禅指導の時には、「無心になってください」ということをよく口にしてしまっています。しかし私もそうなのですが、自分の心には愛着があつて、なかなかこれを捨てる事はできません。また、無心になろうと思えば思う程、頭にいろんな事が思い



浮かんでしまいました。だから、道元禪師は、「道を得る事は、まさしく身を以て得るなり」と説かれたのかもしれない。

自己を忘れて、無心になったとき、人は思わぬ潜在能力を發揮する事があるようです。しかし、無心に体が動けるのは、たゆまぬ努力によって、すべてを体が覚えてしまっているからという事も忘れてはいけないと思います。

また、道元禪師は「仏道をなろうというは、自己をならうなり。自己をならうというは自己をわするなり」とも説かれています。「仏道(正しい道)を知るには、

本当の自己を知らなければならぬ。本当の自己を知るには、自己を忘れなければならない」のです。私たちにとって、自己を忘れると言う事は、とても難しい事です。人はどうして、自己を忘れる事ができないのか、それはふだんあまりに、自分の過去と、未来にとらわれすぎているからではないでしょうか。過去の過ちにくよくよしたり、過去の思い込みで人を憎んだり、未来に思い描いた自己

の姿と現実とを比べて自信をなくしてしまったりと。多くは苦しみの原因になっているのですが、人はこれこそが自分だと信じて、愛着を断ち切る事ができません。しかし過去の自己、未来の自己を忘れる事ができたら、そこには、ありのままの今の自己、即ち、自らの五感によって自然をありのままに感じている素直な自己があるだけだと思います。自己を忘れるとは、ありのままの自己になる事ではないのでしょうか。ありのままの自己はとも楽に生きられる自己だと思えます。私は、坐禅はある意味、自己を忘れる作法だともいえるのではないかと思っています。

善き縁



夜が明けるときには、太陽が顔を出す前に、まず東の空が明るくなる。やがてまばゆい光と共に太陽がのぼってくる。そのように善いことがある前には、善い兆しがある。善い兆しを得るには善き教

えと縁を結ばねばならない。善き師に出会い、善き言葉を聞き、善き集いのなかであれば、善い兆しは、すでにあなたの顔を明るくしているはずです。

浄財寄進者御芳名

金 十万円 高田 学 殿

令和三年 行事予定

三月二十日(土) 春分の日

お盆墓経(平和公園)八時~十四時

永代供養墓 合同供養 十三時~

八月八日(日) 山の日

お盆墓経(平和公園)八時~十四時

永代供養墓 合同供養 十三時~

八月十七日(火)

施食会(天寧寺) 十三時~

九月二十日(月) 敬老の日

永代経(天寧寺) 十三時~

九月二十三日(木) 秋分の日

彼岸墓経(平和公園)八時~十四時

永代供養墓 合同供養 十三時~

十二月十五日(水)

三宝大荒神大祭(天寧寺三宝殿)

※永代経申込者の合同供養です。永代供養墓に納骨されている方のご供養ではございません。

平和公園内天寧寺霊苑

新規墓地分譲中

永代供養個別墓

永代供養合祀墓

※檀信徒以外でも使用可。宗派不問。詳しくはお電話でお問い合わせ下さい

